# 知りたい・たずねたいという思いをもって英語で表現する子ども

## ― 中学１年 Unit 7 サンフランシスコの学校，Fuzoku English Day の実践から ―

## １　単元のねらい

Fuzoku English Dayに来校するInternational Guestsに学校生活や外国の様子について質問し，分かった内容をまとめ，友だちに話して伝える。

## ２　授業の構想

### ⑴ 子どものとらえについて

本学級の生徒は，表現活動を好み，特に英語を使って誰かと交流する活動に大変意欲的に取り組むことができる。これは小学校外国語活動での音声を中心とした外国語への慣れ親しみと相手意識のある活動によるところが大きいと考える。以下に示すふりかえりは，昨年６月にアメリカの留学生に英語朗読劇を披露した際のものである。小学校外国語活動で学習した『桃太郎』を班ごとに発表し，その後班員と留学生とで質問し合うなどの交流の機会をもった。

- 今日は桃太郎の発表をしました。自分の英語が通じるか心配だったけど，ジェスチャーなども使ってなんとか分かってもらえました。質問もお互いに聞けてよかったです。またこういう機会があったら積極的に話をしたいです。もっといろんなことが聞きたかったのでこれから英語をがんばります。（生徒Ａ）
- （これまでに学習して）知っていることだけでも意外と理解できて驚いたし，通じてうれしかったです。もっとちゃんとした話ができるようにもなりたいです。（生徒Ｂ）
- 小学校でも桃太郎は発表したけど，話を知っている日本の人に見てもらったので，それはそれでがんばったと思ったけど，今日はアメリカの人だったから，それで分かってもらって拍手してもらってすごく嬉しかったです。（生徒Ｃ）

生徒Ａは自分の英語の知識や能力で会話が可能であるか不安に思いながらも，ジェスチャーなどを使ってなんとか留学生とコミュニケーションを図り，それができた達成感を得ている。生徒Ｂも既習事項や自身のこれまでの知識によって意思疎通を図ることができた喜びを感じており，学習したことが実際のコミュニケーションの手段として役立ったことを実感している。また，このような交流の機会がさらに英語を学習したいと思うきっかけになっていることが両生徒のふりかえりから分かる。

英語を学習していて，最も生徒が達成感をもてるのは，実際に自分から発信した英語が他者に通じたときであろう。その相手がネイティブスピーカーであれば，その達成感はなおさらであると考えられる。生徒Ｃのふりかえりからはそれがありありと感じられる。このような言語使用の場面を意図的かつ計画的に設定することが，生徒が自ら問いをもち学び続けるためには必要なのである。

### ⑵ 本単元の内容と外国語活動・英語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

本校では，毎年 Fuzoku English Dayという国際交流員や留学生と英語で交流する機会を設けている。近年外国や外国の方が日常生活に身近になってきたが，それでも生徒には外国の方と触れ合う機会はあまりないのが現状である。このような機会に生徒は「英語で話したい」「相手が何を話しているのか分かるようになりたい」と強く思うようになり，何を学習していくと自分の思いが達成できるだろうか，と主体的に英語学習に取り組むようになる。本学校園外国語活動・英語科では，表現するために必要となる単語，文法，表現方法を身に付けるなどといった，目的を達成するために自身の思い描く姿に一歩ずつ近づく際に生じる疑問や願いを「問い」としている。そこで，



単元の冒頭において，外国の方との交流を通して知り得たことをまとめ，お互いに共有し合うという単元全体の目標を提示することによって，問いをもち追求する姿が見られるのではないかと考える。このように提示することで，生徒に単元を通した目的意識が芽生えることを期待する。

### ⑶ 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

生徒が問いをもち，追求する姿を求めて，本単元では教科構想で挙げた３点のうち，次の２点を重視して単元を構想する。

#### ① 子どもが「思い」を抱くことのできる教材の工夫

中学１年生は英語学習の入門期である。生徒の学習意欲の継続・向上のために，この時期に英語という言語の有用性や，英語を介したコミュニケーションの成功体験を生徒が複数回経験する機会を計画的に設定することが重要であると考える。そのためには，どのように生徒と教材を出会わせるかがポイントとなる。小学校での外国語活動において，音声面を中心とした英語でのコミュニケーションに慣れ親しんだ生徒達は，英語で自分の伝えたいことを伝えることができたとき，また，他者から得る英語の情報を理解することができたときに達成感を経験している。そこで，学習したことが実際のコミュニケーションの場で表現するのに有用な材料になることを実感することができるように，単元の終末に外国の方へのインタビュー活動を仕組む。また，そこで知り得た情報を友だちに伝える活動も設けることで，この一連の学習活動に対する使命感や学習意欲も増進するものと考える。例年 Fuzoku English Day後には生徒から，「もっとたくさんの外国の方と交流がしたかった」「他のグループはどんな人と交流したか知りたい」といった声があがる。それは，全生徒がInternational Guests全員とは交流することができないためである。本単元のような構成にすることで，生徒の抱く「もっと」という思いに応える単元構造になると考える。つまり，自分自身が直接全ての方との交流ができなくても，友だちからの情報により相手について思いをはせることや，来年の交流での相手と自分の姿を想像するなどが可能になるということである。

#### ②「伝えたい」「知りたい」という気持ちをくすぐる指導の工夫

本学校園特別支援教育部の研究の一環として，授業のユニバーサルデザイン化を中学１年生英語の授業で取り組んでいる。本単元の授業に先立って，生徒の学習意識調査を行った。教科構想で挙げた以下の４点について，生徒の授業での実態（授業中に行う学習活動や教師のはたらきかけや支援に対して生徒自身がどのように感じているのか）に触れつつ述べていく。生徒は「英語ができるようになりたい」「分かるようになりたい」との思いをもって授業に取り組んでいる。その思いに応える手立てとして，生徒の「伝えたい」「知りたい」という気持ちを引き出す指導に，学習意識調査の結果を取り入れている。

(i) 相手の立場や考え方を尊重しながら自分の考えを表現することができる学習環境
(ii) 気付きが生まれる学び合い
(iii) 明確な指導目標のあるコミュニケーション活動の充実
(iv) 様々なタイプの学習者にあった学習方法の提示

上記 (i) ～ (iii) を目指して，本単元では帯活動として，ピクチャートークを行う。これはランダムに示される写真から１枚選び，その写真上に現れている人物に自分がなりきり，自身についての情報をパートナーに伝えるという活動である。パートナーは相手から得た情報をもとに質問をし，会話を広げて，お互いにやりとりを続けることを目指す。毎回どのような写真が出てくるか分からないため，生徒には即興で英文を組み立てることが求められる。これは単元の終末で行うインタビュー活動に必要な力である。初めて出会うInternational Guestsがどのようなことを伝えたいと思っているのか，そこで得た情報をより詳しく知るために生徒は進んで質問を考え，さらに相手について理解を深めようと考えをめぐらせることになる。生徒はすすんで辞書を活用し，自分の伝え

たいことを調べたり，相手の言ったことは何を伝えたいのかを調べたりする。生徒の約88%が「ピクチャートークなどで実際に英語を使って話をする」ことは取り組みやすい，分かりやすいと解答している。実際に自分が学習したことを使って話してみて，相手からの反応がすぐ見えるこの活動は自身の習熟度が分かりやすいのであろう。お互いが同じ写真について話すのだが，着眼点により表出される英文は異なることがある。自分が思い付かなかったような英文で相手が話を切り出すと，自分も次回はそのように話してみようとお互いに気付きが生まれるのである。また毎回のピクチャートークの最後には教師と生徒によるピクチャートークを行う。代表の生徒と教師が会話するのを他の生徒はしっかりと聞き，その後の自分自身の表現活動に活用できる。生徒同士で安心して表現活動に取り組むことのできる，また多くの人の前で話すときにも安心して話すことのできる環境を学習者同士で作り上げる学習の場の規律を生徒間で作るからこそ可能である活動だと考える。

また(iv)様々なタイプの学習者にあった学習方法の提示については，本学校園特別支援教育部（H27年度より学習生活支援研究センターに改組）による授業分析や生徒の意識調査をもとに，学習者の学習方法や授業者のはたらきかけを工夫する。これによって生徒の「知りたい」「伝えたい」に応えることができるのではないかと考える。

教室内には様々な認知特性をもった生徒がおり，ともに関わり合いながら授業に取り組んでいる。一斉授業の形態の中にも，それぞれの認知特性に合わせた情報提示方法や学習活動を提供することができる。そこで，本単元では特に「焦点化」「視覚支援」「共有活動」の３点を重視し，さまざまなタイプの学習者に合わせた学習活動をいかに１時間の授業時間内に盛り込むことができるかを考える。以下の表に本単元を通して行う学習者の学習活動と授業者のはたらきかけの内容を示す（日本授業UD学会，http://hwm8.gyao.ne.jp/kokugouniversal/参照）。

| 焦点化 | 視覚支援 | 共有活動 |
|---|---|---|
| ・ポイントを絞った文法説明<br>・簡潔な口頭指示 | ・口頭指示の図示<br>・映像資料の使用 | ・生徒間で説明し合う機会の設定<br>・短時間で複数の生徒と交流する機会の設定 |

また，これらに加え，毎時間継続して行う習慣化した活動を授業に組み込むことで，学習者が安心して学習に取り組むことができるよう配慮する。

## ３　展開計画（全12時間）

| 次 | 時 | 主な学習と具体的な学習・内容 | 帯活動 |
|---|---|---|---|
| 1 | 1 | ○単元の目標を知ろう<br>・Fuzoku English Dayについて知り，International Guestsに興味をもつ<br>○人についてたずねよう<br>・人物クイズ | ○ピクチャートーク<br>(i)自分の事実を１つ伝えてから相手に質問する<br>(ii)写真の情報をもとに自分のことを述べる<br>相手はそれに対して質問する<br>※ Yes/NoQからWhQへ |
| | 2 | ○時間についてたずねよう<br>・地図アプリで世界旅行 | |
| | 3 | ○ International Guestsについて知ろう<br>・国旗や日本との時差について知る | |
| | 4 | ○いろいろな疑問文に慣れ親しもう①<br>・学校生活ジグソーリーディング | |
| | 5 | ○どちらが人気か比べよう<br>・学級内アンケート | |
| | 6 | ○いろいろな疑問文に慣れ親しもう②<br>・なりきりペアインタビュー | |
| 2 | 7 | ○ International Guestsへの質問を考えよう<br>・グループ間でのインタビュー | |
| | 8 | ○ International Guestsにインタビューしよう<br>・English Dayで実際にインタビューする | |
| 3 | 9<br>10 | ○インタビューをまとめよう<br>・インタビュー内容を伝えられるように各班工夫してまとめる（アナログスライドショー） | |
| | 11<br>12 | ○ International Guestsについて語ろう<br>・International Guestsについてわかりやすくまとめて話す | |



## ４　授業の実際

### (1) 本単元と小学校外国語活動との関連について

本単元では，まずアメリカの中学生の学校生活について教科書読解を通して知ることから学習を始めた。教科書本文は，ビデオレター形式でサンフランシスコの中学校生活の様子が日本の中学生に宛てて伝えられており，インタビュアーが疑問詞を含む疑問文で授業内容や放課後の過ごし方などについてたずねている。疑問詞を含む疑問文とその応答の仕方を学習することによって，学習者は知りたいと思っていることに対する情報獲得の手段が増える。本単元の学習を通して，生徒が本当に知りたいと感じることについてたずねる手段を獲得することを目指した。また，相手からの求めに応じた返答もあわせて学習していった。

本単元で学習する疑問詞を含む疑問文は小学校外国語活動でも扱われている。例えば，Hi, friends!2のLesson 6では時間をたずねる“What time ... ?”を扱っており，生徒にとってはなじみのある表現である。本学年の生徒は，４月の英語学習のスタート時から小学校外国語活動でも行っていたリズムチャンツを継続して授業で行っている。本単元の学習でも，なじみのある表現をリズムチャンツのような慣れ親しみのある活動で繰り返し口にすることによって，生徒は抵抗感なく疑問詞を含む疑問文を習得することができるだろう。本学級の生徒に対して授業への取り組みやすさや理解度についてのアンケートを実施した中に，「リズムチャンツで単語や英文を覚える」という項目があった。これについて，約88%の生徒が「わかりやすい・取り組みやすい」と解答している。外国語活動を経験している１年生ということもあってか，音声としての英語に対する反応がよい。上述のように，これまで各単元のターゲットセンテンスを含むリズムチャンツを継続して行ってきたが，繰り返し口ずさむことで，自然に覚える生徒が多かった。英作文で表現したい内容に適切な文型を思い出せず，困っている生徒に対してチャンツのリズムを一節歌うと，「あ，あれだ！」と気付くことができ，構文のヒントとしても役立っている。リズムチャンツは対話形式になっており，内容は身の回りの出来事や習慣などを話題として，シンプルな表現で構成されている。よって，チャンツを思い出すことで，生徒は授業の様々な機会で自らの表現活動に活用することができるのである。

### (2) 第１次の授業より（表現活動のための基礎的文法事項の習得）

第１次では，外国の学校の様子と日本の学校の様子を比較し，その違いから生徒が外国についての興味や学習意欲をもつように授業を構想した。また，疑問詞を含む疑問文とその返答の文の定着を目指すに当たって，教科書読解を通して，様々な疑問詞を含む疑問文への慣れ親しみを図った。授業の冒頭でFuzoku English Dayに参加するInternational Guestsの出身国にまつわるクイズを行った。このクイズでも疑問詞を含む疑問文を多用し，生徒が質問文を考える際のモデルになるよう心掛けた。クイズの内容は，毎年Fuzoku English Day後に行うアンケートで，話題にしてほしいこととして生徒が挙げる項目を中心に作成し，外国の生活の様子に生徒が興味をもつことをねらいとして行った。その興味付けをもとに，International Guestsへのインタビュー活動へつなげていくことにした。その結果，クイズで使用した英文を思い出して第２次のインタビュー活動で表現する生徒の姿も見られた。

### (3) 第２次の授業より（相手のある表現活動－ International Guestsについて知る）

第２次では，生徒が相手意識をしっかりともてるようにInternational Guestsからのビデオメッセージを見ることから学習を始めた。世界の各地から島根に集っているInternational Guestsが，彼らそれぞれの母語ではなく英語で自分たちに語りかけてくる映像を見て，生徒たちは興味津々であった。名前や出身国が聞き取れたことをうれしそうに話す生徒もいた。ビデオメッセージを見たことにより，自分が交流をする相手に対する具体的なイメージをもつことが可能になり，相手意識が明確になった。

前次までに学習した疑問詞を含む疑問文の復習後に，班ごとにインタビュー内容について話し合い，英語でどのようにたずねるとよいかを考えた。そこでできあがった疑問文を他の班とペアになって模擬インタビュー活動を行った。お互いに作った疑問文を共有することで，自分がたずねたい内容の疑問文をつくる際，どのような視点で疑問文をつくったらよいかを考える手立てにすることができた。実際のインタビュー場面を想定して友だちに質問をすることで，自分のたずねたいと思っている内容が相手に理解してもらえるかどうかを確認する機会となった。また，突然質問からインタビューを始めるのではなく，コミュニケーションとしてのインタビューを意識できている生徒の姿が見られた。あいさつをしてから質問を始めた生徒の姿について授業中に触れると，他のグループでもあいさつを交し合うようになった。また，唐突に質問からインタビューに入るのではなく，自分自身や日本のことについて少し述べてから質問を始める生徒もいた。本単元で帯活動として行ってきたピクチャートークでの経験を生かしている生徒の姿である。

第７時までの授業を経て，Fuzoku English Dayを迎え，International Guestsとのインタビュー活動を行った（**図１**）。第１次で行ったクイズがヒントとなって，下調べをしてInternational Guestsの出身国に関する質問を考えた生徒もいたが，当日Guestsが行うプレゼンテーションの内容は事前に生徒に伝えなかった。そのため，自身が質問しようとする内容についてGuestsがインタビューより先に話題にするかどうかが分からないので，あらかじめの質問の量が大量になった生徒もいた。

**図１：Fuzoku English Day でのインタビューの様子**

インタビューの時間として与えられた10分間は，なんとか自分たちで会話を続けるよう工夫することと課題を設定したが，どのグループもしっかりとインタビュー活動に取り組むことができた。

### (4) 第３次の授業より（相手のある表現活動－友だちに伝える）

第２次でのインタビュー内容を受け，班ごとにプレゼンテーションができるようにまとめる活動とプレゼンテーション大会を設定した。プレゼンテーション大会は２学級ずつ合同で行い，同じInternational Guestにインタビューした２班のプレゼンテーション内容を比較し，どちらの班の内容がより興味深いか，伝える際の英語力はどうかという観点で相互評価した。

自分達がインタビューした内容は他の班の友だちは知らない情報であるので，インタビュー時のメモをもとに，必ず伝えなければならない情報やぜひ友だちにも伝えたいと思う情報を班で話し合い，プレゼンテーション内容をまとめていった。International Guestsはほぼ英語で話し，生徒が理解できずに困ったような表情をすると，ジェスチャーや視覚資料で補足をしてくれた。そのことを生徒もよく覚えていて，自分達が英語（ことば）で伝えられないことは視覚情報でカバーするなど工夫をしてプレゼンテーション資料を作成することができた。また，プレゼンテーションの際も，一方的に情報をフローする形式ではなく，工夫して伝えることを意識した班が多かった。International Guestsとのやりとりを思い出して，聴衆に問いかけをしたり，クイズ形式にして内容を紹介したりと，どのように伝えると相手にとって分かりやすくなるか，興味をもって聞いてもらえるかということを考えた相手のある表現活動にすることができた。



## ５　おわりに

本単元の終末に行ったふりかえりを以下に挙げる。

- 様々な国の文化について知ることのできるよい機会となりました。何とか無事発表を終えることができ，安心しました。日本の食べ物などを好きとおっしゃっていた方が多かったので，日本の文化・食事を誇りに思おうと思いました。来年のEnglish Dayが楽しみです。（生徒Ｄ）
- English Dayを通して，いろんな国の生活を聞いたりして，日本と同じだったり，違ったりするところをたくさん発見することができました。たくさんの量の情報を発表にまとめていくのは大変でした。他のグループの発表で分からない単語もたくさんあったけれど，これからしっかり分かるようにしていきたいです。（生徒Ｅ）
- ゲストのみなさんとのお話をすごく楽しみにしていました。実際にしゃべりたいことがたくさんあったけれど，それを英語でしゃべるのは大変でした。これからもっと英語の勉強をがんばらないといけないなと思いました。（生徒Ｆ）

これらの生徒のように，多くの生徒が外国の生活や文化に触れることについて好意的にとらえ，来年度のEnglish Dayを楽しみにするとともに，自身の英語力の向上を目指すと述べている。また，自国の文化や生活について顧みる機会になったこともうかがえる。実際に外国の方とのコミュニケーションを経験したからこそ，もっとできるようになりたい，分かるようになりたいという気持ちが自然とわき出て，学習意欲へとつながるのだろう。

外国語は短期間に習得が可能なものではないが，中学校３年間の英語の授業で行う様々な言語活動を通して，英語を理解し，英語で表現できる実践的な運用能力を養っていかなければならない。そこで課題となるのが言語の使用場面をどのように授業中に設定するかである。学習指導要領には，「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動においては，具体的な場面や状況に合った適切な表現を自ら考えて言語活動ができるようにすること。」とある。本単元の学習では，終末に目的意識と相手意識の両方を満たす活動を仕組むことができたが，毎回の授業内でこのような設定は理想ではあるが難しい。いかに生徒にとって有意味かつ実際の使用場面に近付けた言語活動の場を設定するかが今後も課題である。

中学１年生という時期は，「伝えたい」「知りたい」と思うことと英語力（言語運用能力）に隔たりがあることがもう一つの課題といえる。しかし，本単元のように生徒の「伝えたい」「知りたい」という思いがあれば，生徒は自ら辞書を用い，既習の知識と合わせて自分なりに表現を工夫することが分かった。そして，２年生や３年生で学習する文法事項であっても，自分で調べて伝えられる文にしたのだという自信が支えとなって，積極的にInternational Guestsに話しかけたり，プレゼンテーションの場で発表したりすることができた。本単元では疑問詞を含む疑問文がターゲットセンテンスであったが，この学習を経て，自らが必要とする情報を得るためにどのような質問を投げかけると相手から適切な返答を受けることができるかということが分かり，随分とコミュニケーションの内容が向上した。

今後も，まず生徒が「知りたい」「伝えたい」と思うような教材との出会いや，その学習過程で生じる「知りたい」「伝えたい」に応えることができるように研究を深めていきたい。

（文責　岩﨑　香織）